

## 令和元年度 学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	<input type="checkbox"/> 共同研究推進 <input type="checkbox"/> 若手教員研究支援 <input checked="" type="checkbox"/> 個人研究支援 <input type="checkbox"/> 研究推進重点設備 <input type="checkbox"/> 研究推進設備修繕
プロジェクトの名称	現代バリの病・障害・死生観を巡る身体論の研究 －民俗医療と近代医療が交わる視座から
報告者氏名・所属・職名	村田敦郎・函館校・准教授
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	村田敦郎・函館校・准教授

## 研究内容及び成果の概要

医療人類学では、なぜ近代医療と民俗医療が並行して利用されるのか、なぜ民俗医療の持続が可能なのか、を問うてきた経緯がある。バリには今でも慢性病のようなさまざまな肉体的心理的病気や、ストレスのあるライフ・スタイルによって生じた不安が人々の中に満ちており、呪術医などの民俗医療者のところに来訪するクライアントが多く存在し、近代医療に対して不信感をもっている。彼らの多くは病気が長引くと、近代医療は不十分と感じ始め、超自然な存在に原因を求める傾向にある。そのような状況において、彼らは民俗治療者を診察にもっとも適したものとみなすようになる。つまり病気と治療の文化的モデルが民俗治療者と彼らの仕事の存続にきわめて深い関係であることを明らかにした。しかしここで、なぜクライアントと治療者との間に、文化モデルの共有を可能にする密接な関係が維持できるのかという疑問が残る。今回の研究においては、呪術医の信頼性がいかにして維持され更新されるかに着目して調査を進めた。

バリにおいては、患者と呪術医に通底する治療効果への確信を支えている大きな要素が、呪術医たちの演出と言説である。前者は治療儀礼におけるパフォーマンスや治療の場所（宗教的雰囲気演出）や道具立てであり、後者は治療者自身が語る自分の能力や物語、そして他の治療者との対比である。本論ではこの二つの視座を中心に、バリの呪術医たちの治療パフォーマンスや自己評価、治療観と治療経験、他の呪術医に対する評価を題材にして治療の説得力がいかに生成されるかを題材とした。言説空間における治療効果の語りの説得力とは（1）治療者と患者の間で世界観を共有していること（2）呪術医と治療神の強い関係性（3）奇跡的回復の物語の存在（4）村外から患者が来訪する著名性、（5）重病者の最終的な治療の受け入れ先になる、大きくこの五つに帰することがわかった。これら治療にまつわる語りが、バリの民俗医療における治療効果に対する信頼性と医療文化システムを維持させ、また治療者と患者のあいだにバリ独自の治療の説明モデルを共有させることが明らかとなった。とりわけ呪術医と患者たちがバリ＝ヒンドゥーの世界観を共有し続けることを可能にした背景には、呪術医たちの修練と治療実績、そして高い自己評価と他者批判により敬虔な信仰心を基にした「清き人」という自己演出があったのである。



写真1. 治療に使用する蛇型の呪物



写真2. 治療神を患者に憑依させる呪術医

上記の結果は、バリの人々の宗教的世界観を含めた治療姿勢を明らかにしており、代替医療の有用性や開発医療研究へ応用できる基盤研究となると考えられる。

<b>成果の公表の状況</b>	
【著書】	
【学术论文】 村田敦郎, 「私こそ清き人 ーバリ島における呪術医の自己評価と他者批判、言説空間における「治療評価」の説得力に関する研究ー」『別冊 総合人間科学』2号, 2020年3月、N.P.	
<b>教育現場で活用可能な分野・教材等</b>	
社会科の分野において、異文化理解や開発援助の課題等を考える際に活用可能である。	
配布又はダウンロード可能な資料	
問合わせ先	代表者：村田敦郎 電 話：0138-44-4411 F A X：0138-44-4380 mail : murata.atsuro@h.hokkyodai.ac.jp